

岐阜キリシタン小史(35)―大垣のキリシタン―

岐阜県西濃地方のキリシタンについては、これまで詳しく触れる機会がなかった。

西濃地方にもキリシタンがいたことは、『尾濃葉栗見聞集』に記録が残されている（「岐阜キリシタン小史(20)」参照）。また、「岐阜キリシタン小史(11)」の年表の中で、天正 10（1582）年と慶長 11（1606）年の出来事について言及したが、それ以外の記事を見つけれなかった。

天正 10（1582）年：宣教師グレゴリヨが、大垣にかつて信長の息子を養育したジョネという老信徒の家に滞在し、200 名の信徒に洗礼を授けた。

慶長 11（1606）年：美濃・十七条（現：瑞穂市十七条）の城主、稲葉政貞夫妻およびその家臣 50 名が受洗した。

同年：大垣城主・石川康通が受洗し、フランシスコの洗礼名を授かった。

今回は、最初にこの慶長 11（1606）年の出来事に注目する。

大垣藩の初代藩主石川康通（1554-1607）は、徳川家康の重臣であった石川家成の長男として生まれ、徳川譜代大名として重要な地位にあった。また、康通の従兄には石川数正（後に豊臣家に仕える）がおり、彼はキリスト教に関心を持っていたとする説があるなど、石川家とキリシタンとの関わりは以前からあった可能性がある。康通は関ヶ原の戦いでの功績により、慶長 6 年（1601 年）に美濃大垣藩の初代藩主として 5 万石で入封した。

慶長 11（1606）年、康通は正式にキリスト教に改宗し、「フランシスコ」という洗礼名を授かっている。しかし、改宗の翌年慶長 12（1607）年に病のため亡くなった。その後、彼の妻が京都でキリシタンの支援者になったという記録が残されており、康通の死後も石川家とキリスト教徒の関係が続いていたことが窺える。

康通が受洗した同年に、稲葉政貞夫妻とその家臣 50 名も受洗している。稲葉家は将軍家光の乳母春日局とゆかりのある家であり、政貞は春日局の夫・稲葉正勝の養子である。彼は徳川家康に仕えて御小姓となり、美濃国十七条（現在の岐阜県瑞穂市十七条）で千石を拝領した。その後、尾張藩主徳川義直の家臣となっている。

そして、今回はもうひとつの別の出来事を紹介する。下記は『大垣宿問屋留書』の中の記事である。

今度吉利支丹之宗旨ゆふけんと申坊主之儀先年岡部内膳殿御代當地へ出入仕候然所に彼ゆふけん吉利支丹之由内膳殿御聞被成當地七八年以前に御拂被成候後は一度も大垣御城下之儀ハ不及申、在々へも出入不仕候、尤近年之儀ハ彼者有所も不存候、若此旨偽り於申は此連判之者如何様之曲事にも可被仰付候、爲後日仍如件

寛永拾貳年亥霜月廿三日

大垣町年寄

御奉行衆

（現代語訳）今度、キリシタンの宗旨を説いていた僧侶のゆうけんについて、この僧侶は先年岡部内膳殿（岡部長盛）が当地域の領主であった時代（1624～1632）に、当地へ出入りしていました。ところが、そのゆうけんがキリシタンであるということが内膳殿のお耳に入り、当地から七、八年ほど前に追放されました。追放されて以降は、一度も大垣の城下はもちろんのこと、村々へも出入りしておりません。もっとも、近年のことは、その者がどこにいるのかも存じ上げません。もしこの申し上げた内容が偽りであったならば、この連判した者たちは、いかなる重罪でも仰せつけられる覚悟です。後日のために、よって件の如し（以上の通り）。

寛永 12（1635）年 11 月 23 日

大垣町 年寄一同

御奉行集（お奉行様方）

寛永 12（1635）年といえば、島原の乱の 2 年前。キリシタン弾圧がいよいよ厳しくなろうという時期である。それ以前に大垣では「ゆうけん」というキリシタンが宣教活動を行っていたのである。

キリシタンとは関係ないが、大垣は松尾芭蕉の『奥の細道』のむすびの地（終着点）。大垣城の近くには「奥の細道むすびの地記念館」という大垣市の施設があり、一見の価値があります!!



焼失前の大垣城 大垣城は昭和 20（1945）年 7 月 29 日の大垣空襲によって焼失した